

政権が変わって郵政民営化の見直しに拍車がかかりそうです。

国民新党の亀井静香郵政・金融担当相は就任後、民営化見直しに向けて積極的に動き出し、とうとう、10月20日に西川善文社長が「政府と隔たりがある」として辞任を表明しました。

更に、翌21日、同相が次期社長として元大蔵省次官である斎藤次郎氏を起用すると発表するに及び、郵政民営化見直しは、一段と加速する勢いです。

しかし、郵政民営化見直しの具体的な案や、その後の経営像は依然として曖昧なままであるため、小泉純一郎元首相による改革の後戻りでしかなく、また、日銀総裁人事決定の際に自民党が出した候補を官僚出身である事から拒否した民主党がこの様な官僚出身者を抜擢したとして、マスコミは批判の大合唱です。

宮本百合子のエッセイに「郵便切手」というのがあり、

「これまで、郵便切手というものは、私たちのつましい生活と深いつながりのある親しみぶかいものであった。三銭の切手一枚で封書が出せた頃、あのうす桃色の小さい四角い切手は、都会に暮しているものに故郷のたよりを、田舎に住んでいるものに、都会の生活の物語をもたらす仲だちであった。私の子供の時分には、台帳に一枚ずつ切手を貼ってゆく郵便貯金のやりかたがあった。一日に一銭でも、二銭でも、切手を買って貼りつけていって、台紙が一杯に詰まると、郵便局へもってゆく。そんなやりかたであったように思う。その頃は、十銭の郵便切手を買うことは一年のうちにめったになかった。十銭の切手は外国郵便につかわれたのだから。どんなうちでも毎日外国へ出す手紙はなかったから。

三銭が四銭になり七銭になり十銭になった。切手のねだんは、いつも物価の値上りの一歩ずつあとを追ってたかくなかった。封書へはる一枚の切手の値があがることは、既に生計費がその幾層倍かの率で高価になっていることを示したし、同時にそれは、日本の権力者たちが、ますます内実の苦しい、勝味のない侵略戦争を押しひろげて行ったことを示したのであった。」

という行で始まります。

エッセイにあるように、日本全国一律の料金で、「田舎に住んでいるものに、都会の生活の物語をもたらす仲だちであった。」ものが、過疎地の特定郵便局の閉鎖などで、郵便にも格差が生じているとして、世間一般に一番分かり易い、見直し派の論拠となっています。

貯金・保険事業についても、利益が見込めないなどの理由により郵便局以外の金融機関がない地域で、現実に幾つかの郵便局が廃止され、「金融空白地」が出来るとはならないかとの懸念も、相次いで起っています。

ところで、民営化の後戻りが起ると、最大の課題であった「郵便貯金」と「簡易保険」で集めた合計350兆円はどうなるのでしょうか。

今までは、郵便局が集めたこのお金が、日本道路公団などの特殊法人へ貸し出され、赤字の道路が作られるような状況が生まれていました。

エッセイで指摘するような勝ち目のない戦争に注ぎ込んだと同様に「日本の権力者たちが、ますます内実の苦しい、費用対効果のない道路建設を押しひろげて行った」ような、民営化前の状況に戻ることはないでしょうか。

小泉元首相は、政界を引退したので、吾関せずと「郵政放り投げ」、麻生前首相は、「郵政に反対発言」以来沈黙を守り、鳩山元総務大臣は郵政見直し賛成発言で、亀井静香郵政・金融担当相はしゃいでいるなど、心配です。

官業回帰となると、2005年の郵政選挙での自民党圧勝は何だったのでしょうか。今声高に聞こえて来るのは、「日銀総裁人事決定の際に自民党が出した候補を官僚出身である事から拒否した民主党がこの様な官僚出身者を抜擢した。」ということだけです。

官業回帰はもつての外、我々は、もう一度冷静になって、郵政民営化に付いて考える必要があると思います。



### < 郵政民営化 >

日本政府が1990年代末から2000年代にかけて行っていた郵政三事業（郵便・簡易保険・郵便貯金）を民営化することを目的とした政策である。

「民営化」議論によって語られる「郵政四事業」とは、従来の三事業に含まれていた郵便局の窓口での接客サービスである「窓口業務」を、別事業として区分し、一つの事業として加えたものである。



<宮本百合子(1899-1951)>

小説家、評論家。旧姓中條。本名ユリ。東京市小石川区(現・文京区)生まれ。日本女子大学英文科中退。

17歳の時に『貧しき人々の群』で文壇に登場、天才少女として注目を集め、その後もプロレタリア文学の作家、民主主義文学のリーダーとして活躍した。



日本共産党元委員長宮本顕治の元妻で、宮本と共に投獄、執筆禁止などを繰り返しながら活動を展開した。

著書に『貧しき人々の群』『伸子』『一九三二年の春』『乳房』『杉垣』『三月の第四日曜』『播州平野』『風知草』『二つの庭』『道標』など。

### 春秋：「郵政の官業回帰」(10/22)

「イミフー」と若者がよく口にしている。意味不明のことだが、これにはいろいろな思いがこもっているらしい。実は意味は分かるけれど理解できない、という場合にも使われるのだと北原保雄氏監修の「みんなで国語辞典！」にある。

日本郵政の新しい社長に元大蔵事務次官をあてる人事はどうだろう。旧大蔵省きっての逸材で、10年にひとりと評された大物次官で、今も政官界に太いパイプを持ち……と聞かされればなるほどとは思ふ。しかし新政権のめざす天下りの根絶や「脱官僚」はどこへ行ったのやら、どうも胸にストーンと落ちない話だ。

いや、郵政の官業回帰に躍起の亀井大臣としては、かくも意味深い起用はないと考えているのかもしれない。事業を民から官へと逆戻りさせるのだ。それにふさわしいトップを据えた次第だろうか。こうしてすっかり先祖返りしそうな巨大組織をどう舵(かじ)取りするのか、肝心なところは見えないままの人事劇である。

「青竹を割ったような剛直な人だ」などと亀井さんが元次官を持ち上げれば、民主党の原口総務相も「最高、最適な方」と褒めちぎっている。たしかに出身がどこであれ能力識見が第一。とはいえ、昨年の日銀総裁人事で元官僚をかたくなに拒んだ民主党の姿は記憶に新しい。やはりイミフーとつぶやきたくなる。

<北原保雄(1936-)>

国語学者・言語学者。新潟県柏崎市出身。東京教育大学大学院修了。筑波大学名誉教授(元学長)。文化審議会委員(国語分科会会長)。

日本語に関する単著や監修を務めた著書多数あり、中でも『問題な日本語』は70万部を超えるベストセラーである。

TBS系列で放送されたバラエティ番組『クイズ!日本語王』では御意見番として出演していた。

著書に『日本語の世界6』『概説日本語』『文法的に生きる』『日本語助動詞の研究』『表現文法の方法』『青葉は青いか』『類義の日本語』『達人の日本語』『KY式日本語』など。



### 天声人語：「元官僚という意識」(10/23)

藤沢周平を読む楽しみの一つは、文章の端々で、その奥ゆかしい人柄にふれることだ。作家になる前は食品業界紙の記者をしていた。名をなしてからのこと、旧知の社長に伝記の執筆を頼まれたそうだ。

迷った末に引き受けた理由をこう書いている。「十五年間、その業界から暮らしの糧(か)をもらったことを、かりそめに思うべきではない、という気持ちがあったからである」。この人らしい律義さが筆ににじみ出る。

日本郵政の次の社長になる斎藤次郎氏が、律義でないと言うのではない。だが大蔵省を辞めて15年はたつから、もう「元官僚という意識はない」と言う。小説家に比べて実務家は、過去を彼方(かなた)に押しやるのが得意なようである。

「10年に一人」と言われた大物官僚である。それこそ、かりそめではない。亀井大臣の人選に首相も驚いたというが、ならなぜ退けぬ。「辞めて長い」とかぼう声は弱々しい。脱官僚、天下り根絶を売る鳩山商店の看板はこれでガタリと傾いた。

亀井さんの声ばかりが相変わらず元気だ。先ごろの小欄で、俳句の季語の「亀鳴く」は想像だと書いたら、実際に聞いたという便りを多数頂戴(ちょうだい)した。亀に発声器官はないが、呼気などが声のように聞こえることがあるらしい。

企業でも何でも、人事を見れば「権力」の重心はおぼろに透けてくるものだ。斎藤氏が小沢幹事長に近いと聞けば、首相のリーダーシップにも疑問符がつく。蟻(あり)ならぬ亀の一穴から土手が崩れる心配もあろう。亀鳴くや事と違ひし志 安住敦。鳩山さんの心境だろうか。

< 藤沢周平 (1927-1997) >

時代小説作家。本名小菅留治。山形県鶴岡市出身。山形師範学校(現在の山形大学)卒。山形県西田川郡湯田川村立湯田川中学校(、現在は鶴岡市立鶴岡第四中学校へ統合)教諭、日本食品加工新聞の記者を経て、1971年に『溟い海』で第38回オール讀物新人賞受賞、翌年『暗殺の年輪』で第69回直木賞。本格的な作家生活に入る。



江戸時代を題材とした作品を多く残した。中でも出身地、山形県鶴岡市にあった庄内藩をモデルにしたと言われる架空の藩「海坂藩(うなさかはん)」を舞台にした作品は有名。

著書に『暗殺の年輪』『又蔵の火』『闇の梯子』『檻車墨河を渡る』『竹光始末』『時雨のあと』『雪明かり』『花のあと』『決闘の辻』『蝉しぐれ』など。

### 編集手帳：「国営に逆戻り？」(10/21)

堀口大学の詩「現在教秘義」に、過去はなまけ者の幻だ／未来は馬鹿者の希望だ とある。郵政民営化も、過去と未来のせめぎ合いから始まっている。

推進派は反対派の主張を国営のぬるま湯に浸った なまけ者の幻 と見、反対派は推進派の主張を未来はバラ色と信じて疑わない 馬鹿者の希望 と見た。どちらの主張が正しかったか 民営化からわずか2年余りの現在、答えはまだ出ていない。

答えは出ていないが、郵政解散・総選挙で示された「民でできる仕事は民で」という有権者の意思は今なお重いものがある。政府がきのう閣議決定した「郵政改革の基本方針」には、事実上の国営に逆戻りさせたい意向も見え隠れする。

国民の財産を二束三文でたたき売ろうとした「かんぼの宿」問題を顧みて、日本郵政・西川善文社長の辞任は当然である。経営者という“ハンドル”に不具合があったからといって、しかし、民営化という“自動車”まで解体する理由にはならない。

工夫と改良によって、民営化を 賢者の希望 に変えていくのが筋だろう。時計の針をなまけ者の幻 に戻してはいけない。

< 堀口大學 (1892-1981) >

詩人、フランス文学者。東京・本郷生まれ。慶應義塾大学文学部中退。在学中『スバル』『三田文学』などに詩歌の発表を始める。

青春期を日本と海外の間を往復して過ごし、1919年、処女詩集『月光とピエロ』、処女歌集『パンの笛』を刊行。以後も多数の出版を手がける。

その仕事は作詩、作歌にとどまらず、評論、エッセイ、随筆、研究、翻訳と多方面に及び、生涯に刊行された著訳書は、300点を超える。

作品に、詩集『月光とピエロ』『水の面に書いて』『月夜の園 抒情小曲』『新しき小径』『遠き薔薇』『砂の枕』、歌集『パンの笛』『男ごころ』『涙の念珠』など。その他、評論・随筆・翻訳など多数。



### 余禄：「郵政民営化路線見直し」(10/22)

脊椎(せきつい)カリエスで何年も寝たきりの闘病を続けた俳人、正岡子規は病床で「一寸(ちよっと)見たいと思う物」を挙げた。活動写真、動物園の獅子及び駝鳥(だちょう)、浅草水族館、ピヤホール……、みな新聞で読んだ事物だ。なかに「自動電話及び紅色郵便箱」もあった。

1902年5月26日の記述(病牀六尺)だが、郵便ポストは前年にそれまでの黒から赤に変わった。黒い郵便箱は目立たず、夜はまるで分からなくなると不評で、英国と同じく一番目立つ「赤」に変えたのだ。赤は子規の大好きな色だった。

黒から赤へのポストの切り替えはすぐ定着し、黒い郵便箱はほどなく人々に忘れ去られた。だが平成の郵政事業の官から民への切り替えはどうも一筋縄ではいかない。従来の民営化路線の見直しが閣議決定され、日本郵政トップも交代する。

見直しの柱は郵便だけでなく郵貯・保険にも全国一律サービスを義務づけるもので、これに伴い株式売却は凍結される。また従来の民営化の推進役だった西川善文日本郵政社長は辞任表明し、後任に元大蔵次官の斎藤次郎氏の名があがった。

何も民営化が放棄されたわけではなく、かつて霞が関で名をはせた官僚出身の後任社長だからといって経営に不適格とは限らない。ただ黒と赤をまぜれば目立つ色にならない。この路線転換が民営化のメリットを失わせ、単なる官業回帰に終わりはせぬかとの懸念が聞こえてくる。

4年前はまるで一国の全運命がかかったような争点とされ、有権者多数が選択した郵政民営化だ。その何が間違いで、何が正しかったのか。路線見直しにあたっては、政権トップが国民に明快な説明をするのが政治指導というものだ。

< 正岡子規 (1867-1902) >

俳人、歌人。

俳句・短歌・新体詩・小説・評論・随筆など多方面に渡り創作活動を行い、日本の近代文学に多大な影響を及ぼした、明治時代を代表する文学者の一人である。

子規は日本に野球が導入された最初の頃の熱心な選手でもあり、明治22年(1889年)に咯血してやめるまでやっていた。ポジションは捕手であった。自身の幼名である「升(のぼる)」にちなんで、「野球(のぼーる)」という雅号を用いたこともある。

また「まり投げて見たき広場や春の草」「九つの人九つの場をしめてベースボールの始まらんとす」などと野球に関係のある句や歌を詠むなどしており、野球の普及に貢献したとして平成14年(2002年)野球殿堂入りを果たした。

